

と変わるところはなかった。「訣別」も「掙扎」も、ともにアジアがヨーロッパの「ドレイ」になることを克服する道にほかならなかったのである。両者の違いは、「訣別」が「期待」の放棄と同時にヨーロッパに対する「抵抗」ではなくて、「絶対的な拒絶、絶対的な対決」の道を選ぶのに対し、「掙扎」はあくまで「敗北の自覚の上に立った抵抗の持続」を求める点にあった。つまり「掙扎」は「訣別」と違って、あくまで「欧米近代」の枠組みにとどまって、「抵抗を持続する」方法だったのである。

60年代以後の竹内好は、私の目には一方の足を「掙扎」の方に置きながら、もう一方の足を「訣別」の方に置いていたように見える。竹内が1940年代前半の戦前日本の「近代の超克」論議に、1959年の時点で再考の価値を見たのは、その一つの表れだったろう。この点は、むしろ「日本ナショナリズム」の問題と深く関係している。以下、本論の最後にこの問題を議論して、竹内好再考の現代的意義についてのまとめとしたい。

[XI]

むすび：「日本ナショナリズム」のゆくえ ——「有根」と「無根」と——

1972年7月田中角栄政権の登場とともに打ち出された「日本列島改造」論は、60年代まで日本社会が抱えていた公害、過疎、二重構造などの諸矛盾を一挙に解決するデザインとして、新幹線網や高速道路網、大規模ベッドタウン建設などインフラ公共投資主導の津波のような政策によってこの社会を一変させた。竹内は1951年の「国民文学論争」の提起以来、「欧米近代」に対する「掙扎」の波を起すことで戦後日本の「再生」を期待し、またその「再生」の中から「日本ナショナリズム」の新たな「生成」を展望していたが、その期待と展望は、70年代前半の「列島改造」の

建設投資ラッシュの大音響の中で掻き消される結果となった。

同様に60年代まで日本社会を覆っていた「戦後日本近代」に対する批判、「反欧米近代」や「超近代」の思潮と運動は、1970年を境に「70年安保」の終焉、「全共闘運動」の解体、さらには「連合赤軍事件」などによって急激に退潮し、そのあとには「思想の冬」、もっと言えば「無思想」の時代が到来したのである。

これを後押ししたのが1972年の米中和解と日中国交正常化、戦後世界にパックス・アメリカナとして君臨してきた米国に一貫して非妥協的に対決してきた中国が、突如その対決姿勢を撤回し握手したこと。さらに1975年のベトナム戦争の終結、1978年に始まるベトナムのカンボジア侵攻、そしてポル・ポトの虐殺と中国文化大革命の真相の暴露などが、一連のアジア・イメージの落日と暗転を生むきっかけとなった。

このアジア・イメージの落日は、むしろ松本健一報告が言うように、反面ではNIEsの経済的台頭と「富裕化」という、反面現象としての「アジアの台頭」を生んでいた。しかし、それはアジアが「欧米近代」に対するみずからの文明的「敗北」を受け容れ、「抵抗」も「訣別」も、どちらも放棄することによって、竹内的に言えば「自己を喪失する」ことを代価として獲得した物質的「果実」にほかならなかった。

こうした中で、中尾佐助や上山春平などによって60年代から提唱されていた「日本照葉樹林文化論」⁷¹が、70年代後半以後、徐々に再評価されるようになり、80年代に入ると青木保らが国際化の中での「日本の台頭」を意識しつつ、これがかつての「近代の超克」論と半ば結び付け、「欧米近代文化」と異なる日本近代文化固有論として再提起しようとする動きを見せたりもした。

このような動きは、ある意味では1940年代前半の京都学派が、明治近代以来の物質的近代化の成功による「日本の台頭」を前提として、「近代

の超克」による日本独自の近代を提唱したことと相似していたとも言える⁷²。そこにはすでに竹内好が戦時戦中のアジア主義を「思想なきアジア主義」と評したと同質の「日本ナショナリズム」に向けた萌芽が始まっていたと言えるだろう⁷³。むしろそれはその後約15年を経たのちの1990年代前半に顕在化する「自負心のナショナリズム」とは性格を異にするものだが、そこに「抵抗」の契機を欠いているという意味では共通のものを有していた。

「思想の冬」「無思想」の時代の到来は、このように日本・アジアにおける経済的台頭と、新たなナショナリズムへの胎動によって幕を開けた。この時代の「無思想」性は、一面では竹内流の「抵抗」「掙扎」の契機が大幅に消失し、日本・アジアの社会全般に「自己喪失」の過程が顕著になることによって生じたと言える⁷⁴。しかしそれだけではなかった。他面それは70年代以後の経済発展の加速化がある閾値を越えると同時に、象徴的にはコンピューター革命（IT革命）に見られるように、社会の時間意識の驚異的な加速化が始まったことと深く関係している。思想的に見れば、それはデリダの「脱構築」、浅田彰の「構造と力」「逃走論—スキゾキッズの冒険」を典型とするポスト構造主義に反映されている。意識構造の時間持続的な持久性をパラノイアとして否定するポスト構造主義は、必然的に時間意識の非持続的な加速化こそを文明的に支持するからである。この時期の社会現象、コインロッカーに捨てられた嬰兒のイノチの数々は、この生命時間の持久性に、人々の加速化した時間意識がもはや耐え得なくなったことを示すものでもあった。

この点が極めて重大な意味を持つのは、本論で繰り返し述べてきたように、イノチの自然生態時間が持つ「持久性」に制約された「等身大」の世界こそ、竹内好がいう「抵抗」「掙扎」の拠点になるものだったからである。典型的には石牟礼道子に見られたような姿勢、すなわち「等身大」世

界の「非政治」をどこまでも引きずりつつ、しかも「国家」「政治」にかかわる姿勢こそが、今日新たな「思想」の拠点として不可欠であるにもかかわらず、この時代の時間意識の加速化が社会の至るところで、この拠点を奪い去ってしまっていること、そこに今日の「無思想」性が現れる理由もあるのである。すでに水俣闘争の事例に見たように、「自己拡張」を続ける「欧米近代」に対する「抵抗」の拠点（根拠地）は、時間の持久性を帯びた「等身大」の世界にほかならなかった。イノチを支える思考の拠点こそが「思想」の名に値するとすれば、そうした「等身大」世界に意識を係留しつつ、同時に国家や政治を撃つ思考こそが求められている。

70年代末から80年代にかけて、日米半導体摩擦が起き、エズラ・F・ヴォーゲルの「ジャパン・アズ・ナンバーワン」がベストセラーになり、90年にはGDPで日本がアメリカに追いつき追い越す状況となった⁷⁵。こうした状況を反映して、日本の歴史教科書が「自虐史観」に傾斜しすぎるとしてこれを批判し、自民族の歴史に「自負心を持ち得る」歴史観をつくるべしとする動きが現れるようになった。1995年7月設立の「自由主義史観研究会」、1997年1月設立の「新しい歴史教科書をつくる会」などがそれである。こうした動きは、明らかに「自負心のナショナリズム」の形成を目指した運動といえることができる。

かつて敗戦直後から1970年まで、およそ四半世紀間にわたり持続した「日本ナショナリズム」は、「反米」を中心的ベクトルとする「抵抗のナショナリズム」であって、いささかも「自負心のナショナリズム」は求められていなかった。しかしその後、前述のように「思想の冬」「無思想」の時代が到来し、加速化し拡大化する時間空間意識が支配するとともに、この「抵抗のナショナリズム」も急速に衰退し、しばらくの空白の時期を経て、90年代半ばからいよいよ「自負心のナショナリズム」が台頭してきたのである。

「抵抗のナショナリズム」は竹内好が戦後日本の「ナショナリズム」再生を求める際、「欧米近代」の「自己拡張」に抗し得る拠点として形成しようとしたものだった。この「抵抗のナショナリズム」は「等身大」世界に意識を係留させつつ、同時に国家・政治を撃つものとして働くという意味では「有根のナショナリズム」と呼ぶこともできる。これに比べて、「自負心のナショナリズム」は、加速化し拡大する時間空間意識によって、持続的な時間空間に支えられる「等身大」世界を切り捨てる方向に働くという意味から「無根のナショナリズム」と呼び得るのである。

今や、人々の時間空間意識が「等身大」の世界から遊離して「仮想（ヴァーチャル）の時間空間」に飛翔する時代となった。小熊英二が正しく指摘しているように、この時代に登場した「自負心のナショナリズム」は、戦前戦時の日本の「ナショナリズム」と比べれば、日本国家の上から下に向けた「ナショナリズム」形成ではなく、むしろ国家・政府批判を含んだ下から上に向けた「ナショナリズム」形成という性格を持っている。しかしその下からのベクトルの中には「等身大」世界に起点を置くという条件がまったく欠けている。そこに「抵抗」のベクトルが存在しない限り、そのような条件が生まれるはずもなかったのである。それゆえそれは明らかに「無根のナショナリズム」としての性格を濃厚に持つことになった。

こうした「無根のナショナリズム」は何も日本社会だけに登場しているのではない。ここではもはや詳しくは論じられないが、1990年代以後の中国社会にもまったく日本と同質の、「自負心のナショナリズム」にして「無根のナショナリズム」が明確に姿を現してきている。日中両社会の「無根のナショナリズム」はともに排他性の強いものとして、極めて情緒的な反中、反日の情念にまわりつかれているが、その主要な舞台はどちらもインターネットの掲示板という仮想の時間空間に置かれている。

「無根のナショナリズム」は「欧米近代」の「自己実現、自己拡張」が極まったところに出現した。フランシス・フクヤマが冷戦崩壊前夜の1989年春に「歴史の終わり？」を刊行し、ヘーゲルの「精神現象学」になぞらえて、「欧米近代」の自由主義精神を「絶対精神」に見立てて、その「自己実現」過程が最終局面に来たとの仮説を立て、ついに歴史はその幕を閉じようとしているとしたのは理由のないことではない。米ブッシュ政権が「自由主義の地球全域での普遍的实现」を唱え続けているのも、ほぼ同じ背景があつてのことである。実際、「欧米近代」の「自己実現、自己拡張」に「抵抗」または「訣別」しようとしたものは、その大半が手痛い挫折を強いられ、歴史の舞台から去っていった。

しかし問題はそれほど単純ではない。現に孫歌報告、張寧報告、薛毅報告に見られるように、奇跡的な高度成長を続ける現下の中国の思想界から、かつて「欧米近代」の「自己実現、自己拡張」に対して「敗北を自覚しつつ、なお抵抗を持続させる」ことを主張した竹内好の思想を再考しようとする知識人が登場していることの意味を重く受け止めねばならない。中国社会にも加速化し拡大化する時間空間意識が圧倒的優位を占める事態が生じている。その中で持続的な生命時間に制約される「等身大」のイノチの世界は暴力的に切り捨てられつつある。この意味では竹内好の問いは依然として有効でもあり、ますます課題の緊急性を帯びてきているとさえ言える。

竹内は魯迅にならって「抵抗」はあくまで「敗北の自覚」に立ってなされねばならないとした。肝心なことは「欧米近代」と「訣別」することではなく、また「勝利の確信」の上立って「抵抗」することでもない。あくまで竹内の本来の方法は「欧米近代」の枠外に飛び出すことではなく、その内側に身を置いて「抵抗」を持続させることに求められていた。その方法は「持続的抵抗」を通じて、「欧米近代」の「自己実現、自己拡張」の

過程で生じるイノチの忘却、「等身大」世界の切捨てという文明的な負の渦流を巻き返すことによって解き放ち、ひいては「自己喪失」から「自己

回復」へと進むことに目的がある。竹内の方法から発する問いは、実はまだ竹内自身によっても十分に試されておらず答えられていない。

- 1 Daniel Bell, *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties*, Harvard University Press, 2000. Herbert Aptheker, *World of C. Wright Mills*, Periodical Service Co., 1976.
- 2 『思想』1956年11月号、「特集・大衆社会」。松下圭一『現代政治の条件』中央公論社、1959年。
- 3 松下圭一『現代日本の政治構成』東京大学出版会、1962年。清水幾太郎『無思想時代の思想』中央公論社、1975年。
- 4 石牟礼道子編『水俣病闘争 わが死民』創土社、2005年、35頁。旧版、現代評論社、1972年。
- 5 このような循環型生態系を室田武、多辺田政弘、植田敦はエントロピー派経済学の観点から「定常開放系」と呼んでいる。植田敦「物質循環による持続可能な社会」(室田・多辺田・植田『循環の経済学——持続可能な社会の条件』学陽書房、1995年)。
- 6 植田敦は石油エネルギーへの転換によって開始した化石燃料の加速度的な大量消費が、「定常開放系」の持続可能な循環を崩壊させてきたと断っている。植田敦『石油と原子力に未来はあるか 増補版—資源物理の考え方』亜紀書房、1987年。
- 7 石牟礼や竹内と同じ問題の地平から「歴史」を見た哲学者として、ここでは市井三郎を上げておく。市井は名著「歴史の進歩とは何か」岩波新書、1971年のなかで、物質的な「富裕」による発展が「歴史の進歩」を測る基準ではないとし、むしろ進歩の基準は「責任を問われることのない、言われなき苦痛」をどれだけ減らすことができたか、にこそ置かれるべきだとした。この苦痛を市井は「不条理の苦痛」とも呼んでいる。よりの確に言えば、この「不条理の苦痛」とは人間が自己のイノチの実存的な時間空間に制約される「等身大」の世界に置かれている、という理由だけで「苦痛」をこうむる場合を指している。たとえばこの時代にアフガニスタンのカンダハルに生を享けたという理由だけで、両親を失い、家族を失うような「苦痛」を身に蒙る少年は、この「不条理の苦痛」にさいなまれているのである。
- 8 坂口安吾「墮落論」『新潮』第43巻第4号、昭和21年。『坂口安吾全集』第14巻、ちくま文庫、1990年、521頁。
- 9 坂口安吾「大井広介という男」『現代文学』第5巻第8号、昭和17年。『坂口安吾全集』第14巻、前掲、405頁。
- 10 坂口安吾「巻頭随筆」『現代文学』第6巻第7号、昭和18年。『坂口安吾全集』第14巻、前掲、473-474頁。
- 11 「情欲論」『劉再復論文選』香港大地図書公司、1986年。劉再復は当時、中国社会科学院文学研究所の所長。
- 12 「文学主体性」『劉再復論文選』前掲。
- 13 1982年に中共中央によって始められた「社会主義精神文明の建設」という大キャンペーンは、当時の倫理道義の崩壊状況にたいする国家指導者のそうした危機感に発するものだった。
- 14 劉再復のこの議論は、1986年から87年にかけて、「劉再復現象」と呼ばれるほどのブームを呼ぶとともに、ブルジョア自由主義的主張として多くの批判が浴びせられた。そのした中で劉再復のこの論点を擁護し、その身柄を保護したのが現在の党主席胡錦濤(当時貴州省党委員会主席)だった。「專題：中共十六大」『星洲日報』国際版、2002年11月10日。
- 15 張寧「“竹内魯迅”的中国位置」(発言提綱)愛知大学21世紀COEプログラム国際中国学研究センター主催国際シンポジウム『日本・中国・世界——竹内好再考と方法論のパラダイム転換』2006年6月30日-7月1日。
- 16 菅孝行「抵抗のアジアは可能か——『魯迅精神』再審」国際シンポジウム『日本・中国・世界——竹内好再考と方法論のパラダイム転換』前掲。
- 17 竹内好「現代思想の動き第8回 アジアのナショナリズム」『朝日新聞』1955年8月25日付。「アジアのナショナリズム」『竹内好全集』第5巻、筑摩書房、1981年、8頁。
- 18 竹内好「日本・中国・革命」『講座中国』第1巻「革命と伝統」筑摩書房、1967年。同『竹内好全集』第4巻、筑摩書房、1980年、341頁。
- 19 もっとも早くこの中国の統一と近代化の関連の問題を取り上げたのは、矢内原忠雄、大上末広、尾崎秀実、中西功らによって展開された1930年代の「中国統一化論争」である。山口博一『地域研究論：地域研究シリーズ』第1巻、第4章 アジア経済研究出版会、1991年に詳しい。30年代の中国の国民国家形成について論じた近年の著作としては、